

シェイクスピア・ウィークというイベントが目指すもの

佐 藤 由 美

What is the Aim of Shakespeare Week?

Yumi SATO

要 旨

シェイクスピア・ウィーク（Shakespeare Week、以下 SW とする）はイギリスで毎年3月下旬に行われている、小学生を対象としたイベントである。シェイクスピア作品を扱うワークショップを中心としたもので、毎年参加する子供の数が増加し続けている。本稿ではこのイベントが支持されている背景を、ナショナル・カリキュラムや小学校における授業や課外活動のあり方から考える。そして、SW が何を旨とするものか考える。

キーワード：シェイクスピア、イギリスの教育制度、カリキュラム

Abstract

Shakespeare Week is an annual event held in the latter half of March, which mainly targets at primary school pupils. It contains workshops about Shakespeare's works, and continues to attract pupils who take part in it. In writing this I will find what is behind the event by looking at the National Curriculum and English classes at primary schools. Finally I will explore what is the aim of SW.

はじめに

シェイクスピア作品は現在、世界の多くの国や地域で知られており、シェイクスピアの名を冠した多様なイベントが行われている。例えば、Shakespeare Festival はアメリカ・オレゴン州で毎年行われ、3月から10月にかけて断続的に各種上演が行われる。日本ではシェイクスピアの誕生日とされる4月23日に最も近い週末に、日本シェイクスピア協会および日本英文学会が協賛する「シェイクスピア祭」が行われる。こちらは研究者および演劇関係者による講演が主である。これらのイベントは成人を主な対象としているが、シェイクスピアの出身地であるイギリスにおいては国内の小学生を主な対象とするシェイクスピア・ウィークというイベントがあり、毎年3月後半に一週間にわたってシェイクスピア・バースプレイス・トラスト（Shakespeare Birthplace Trust、以下 SBT とする）により企画され、全英規模で行われている。シェイクスピアの生誕 450 周年にあたる 2014 年に始まり、現時点（2019 年 5 月 8 日）では 2020 年 3 月 16 日～22 日に向けた準備が始まっている。SW のオフィシャルサイトの最初のページにこのイベントの性質は明記されている。

Shakespeare Week is a national annual celebration giving primary school aged children opportunities for enriching and enjoyable early experiences of Shakespeare.¹⁾

このイベントは、子供（小学生）を主な対象とする国家的行事であるという点に特徴がある。活動予定および情報提供は公式サイトで行われている。本稿ではサイトに掲載されている情報を元に、子供が対象となる理由、提供されている情報の性質、協賛している組織の特徴、このイベントを支える理念等の詳細を述べる。さらに「国家」、ここではイギリス政府が従来の学校教育とシェイクスピア作品の紹介をどう関連付けしようとしているか、またこのイベントを通して自国の子供たちにシェイクスピア作品をどう意識させようとしているかを考えたい。さらには彼らを取り巻く教育環境とどのように関連しているかも視野に入れて、SW がどう受け入れられているか考えたい。

1. SW の目的

SW を実施する団体 SBT とは「ストラットフォード・アポン・エイヴォンにあるシェイクスピアの遺産を管理し、その作品、生涯、時代について学び経験するための

世界的な中心地」²⁾であり、その性質上多数のコレクションを有し、講演会を開催し、研究活動を支援している。SW はその多様な活動の一部であり、独立したサイトを設けるほど重点が置かれている。このサイト中の「Why Celebrate Shakespeare?」と題する項目でシェイクスピアを祝う理由は以下のように説明される。SW の目的を端的に説明していると思われるため、原文を引用する。

Shakespeare is a named author on the curriculum in 65% of countries, studied by around half of the world's schoolchildren every year. He has been hailed as the UK's greatest cultural export, and the foremost reason why people are proud to be British.³⁾

シェイクスピアは「65%の国のカリキュラムで指名される作家で、毎年世界中の学童のおよそ半分が学んでいる」、そして「イギリス最大の文化的な輸出品」であるという記述は、シェイクスピア作品が現在置かれている状況に関する客観的なものに思われる。ただ、その後の「人々がイギリス人であることを誇る最大の理由」という記述から話題は一転する。ここでの「人々」は文脈からいってイギリス人を指していることは明らかであり、そのことから推測できることは二点ある。一つは世界的に知られているシェイクスピアに関するイベントでありながら、これがイギリス国籍を持つ人々を対象にしているということである。もう一つはイギリスのみならず世界の教育や文化に栄光を与えるシェイクスピア作品は、イギリス人に誇りをもたらすものと考えられるべきであるという、SBT に関連するであろう執筆者の信念を示唆している。ここまで読むことで、SW が「小学生に充実した楽しめるシェイクスピアを経験するチャンスを与える、毎年恒例の国の祝祭」であるという、最初のページにある記述は、上記の問題意識から導かれていることがわかる。

次に、執筆者にとってその信念を実現する中で妨げとなるであろう問題が述べられる。「多くのイギリスの子供たちが十代に入ってからやっと、試験のために勉強する義務教育の科目としてシェイクスピアに出会う。多くが長じて後これを難しくて自分に向かないものとみなす」⁴⁾という記述は、古典教育の困難さを端的に伝えるものと思われる。この文では、イギリス人は幼少のうちにシェイクスピア作品と出会ってしかるべきであるという執筆者の主張が示唆されている。また、「自身の子どもたちにシェイクスピア作品を紹介する可能性が低くなる」⁵⁾という記述からは、イギリス人ならシェイクスピア作品を次世代に紹介するのが当然であるという彼らの

もう一つの主張がうかがわれる。

シェイクスピアは自国にも他国にも重要とみなされる文化的資産であるので、それを存続させるべく国を挙げて子供たちに継承させよう、出身地であるイギリス国内で忘れられないように対策しようという、現状認識からくる切迫感が背後にあると言える。

2. SW の特徴

上述の目的を踏まえた上で SW の特徴を述べる。一つは、子供およびその教育に携わる人々への資料が常時無料で公開されていることである。教師、家族、家庭学習の指導者および各種団体を対象とした資料は簡易な登録でアクセス可能となり、要請すれば SBT から資料の現物を入手することもできる。また、さらに配慮がなされているのは、子供向けの資料である。Kids' Zone というページへのリンクがサイトの最初のページに設けられ目立つように工夫されており、子供対象の教材を掲載したこのページは、登録やログインさえ不要である。⁶⁾ 内容も図画工作、語彙、作文、詩作と多様であり、” Why Celebrate Shakespeare?” で言及されているようにカリキュラムの枠を超えているものである。⁷⁾

もう一つの特徴は活動内容の多様性である。例えば、2019 年には上演や映画製作に関するワークショップ、⁸⁾ 子供を対象に作品をリライトする作家が劇の内容について議論するビッグ・シェイクスピア・ディベート (Big Shakespeare Debate)、⁹⁾ さらには地域社会の数か所に本を隠し子供たちに見つけさせる「本探し」(Book Hunt)¹⁰⁾ といったイベントが、シェイクスピアの出身地ストラットフォード・アポン・エイボンを中心としたイギリス各地で行われる。また、SW に協賛する各種劇団や組織によるイベントも SW サイトで告知されている。これらには各地に基盤をおく劇団による上演やワークショップがあり、その中にはマクベスに登場する三人の魔女への模擬裁判など意匠をこらしたもののさもある。¹¹⁾ これらの活動は子供たちが保護者や教師と共に行動することが前提となっている。多くの情報を掲載するのみならず、場合によっては「本探し」のように地域社会の大人たちをも巻き込み、多くの大人が感じているであろう熱意を子供にも伝えたいという枠組みが感じられる。また、書籍を読んで文言のみを習うのではなく、周囲の人々と触れ合いながら声を出し身体を動かすことで作品に関する関心を持たせようという意図も感じられる。

上にあげたような一連の活動の結果、これまでで推定 200 万人の子供たちにシェイクスピアを紹介することができた¹²⁾ 人口約 6000 万人のイギリスにおいて

少なくない数であり、導入は進んでいると言えよう。

3. イギリスの教育制度—シェイクスピア作品との関連

これまで述べてきたように、SW の運営者の意図は、子供たちを楽しませながらシェイクスピア作品に親しませようとするものである。SW がなぜシェイクスピア作品の紹介に多種多様な形で努めるかは、イギリスの教育制度について知ることによってさらにわかりやすくなる。

イギリスの公立学校では、日本の学習指導要領にあたる National Curriculum (以下 NC とする) に沿って教育が行われる。NC では教育内容をイギリス独自の区分けである Key Stage (以下 KS) というグループごとに分けている。KS1 は 5～7 歳、KS2 は 7～11 歳を指し、この二つのグループは小学生にあたる。また、KS3 は 11～14 歳、KS4 は 14～16 歳を指し、中学生にあたる。¹³⁾ 英語は KS1 から 2 では、Spoken Language、Reading、Writing、Spelling、vocabulary、grammar、punctuation and glossary、KS3 から 4 では、Spoken Language、Reading、Writing、Grammar and vocabulary というカテゴリーに分類されている。¹⁴⁾ シェイクスピア作品が必須となるのは KS3 からで、そのことは Reading の中で言及されている。その名は古典作家の中でただ一人明記され、しかも 2 作品読むこととなっている。¹⁵⁾ シェイクスピアが中学入学後からは国家により推奨されていることがこの事実から伝わる。

それに加え、中学校卒業までに受験しなければならない General Certificate of Secondary Education (以下 GCSE) という試験により、シェイクスピアは受験科目の一部ともみなされるようになる。この試験には必須科目と選択科目があるが、英文学は必須科目に属しており、ほぼ必ずシェイクスピア作品が含まれている。この試験の成績が進学先に大きな影響を及ぼすため、主要科目に関連する GCSE 対策のガイドブックは多数出版され、その中にシェイクスピア作品も含まれている。過去に出題された英文学の問題を見れば、それらが筆記形式であり、語句の理解からある一節の解釈までを含む多様さがあることがわかる。¹⁶⁾

小学生時代、すなわち KS1 および 2 に関する NC には古典に関する言及はない。しかし、中学校入学以降シェイクスピアが重視されることを考えれば、子供の教育に関わる人々—保護者や教師など—には早く古典教育を導入するほうが良いと考える者が少なくないと思われる。幼少期から古典作品に親しんでおけば、子供は中学入学後に抵抗なく作品を受け入れ、数年後の試験において有利な状況にいるだろうという理由は想像するに難くない

い。5～6歳からの子供が対象となれば、導入の形は簡素で親しみやすいものにしたいと思うだろう。推定200万人の子供たちがSWに参加するが、彼らの背後にいてSWの必要性を認識して参加手続きを行う教師や保護者の数はその何倍にも上るだろうと考えられる。

4. イギリスの小学校における英語教育—特にシェイクスピア教育について

「(イギリスの)人々がイギリス人であることを誇りに思う最大の理由」とさえ評されるシェイクスピアは、その重要性のために中学校においては義務教育の一部となり、小学校にも導入すべきだと考えられている。これは保護者や教師など子供の周囲にいる大人のみならず政府によっても奨励されてきた。特に2008年は政府やロイヤル・シェイクスピア・カンパニー(Royal Shakespeare Company、以下RSC)がキャンペーンを展開し、ブックレットは無料配布ないし、インターネット上で閲覧可能というアクセスの容易さで注目された。¹⁸⁾ この動きに基本的に変化はないと思われる中、NCでは古典教育について未だ言及されていない。この状況下で小学校ではシェイクスピアはどのような形で導入されているだろうか。

NCによれば小学生におけるReadingは「詩、物語およびノンフィクション」¹⁹⁾を読むことから始まる。それらを授業でどのような形で読み進めるかについては、姿勢がSWの理念と共通していると思わせる情報がある。例えば、吉野(2018b)によれば、イギリスの学校には検定教科書というものはなく、学校が生徒の英語力や関心の対象に応じて貸し出す形で利用される。また、生徒の理解度を確認する方法はさまざまで、彼らに読ませた後その物語を題材に絵を描く、続編を書く、工作をする、時には登場人物の仮装をする等のカリキュラムの枠を超えたものもある。²⁰⁾ この体験型学習とも呼べる形態は、SWのKids' zoneにおいて子供たちそれぞれが関心を持った教材をダウンロードすることができ、それらがカリキュラムの枠を超えていることを思い出させる。

シェイクスピアについても中学校入学までは「文字ベースではなく、演劇ベース」²⁰⁾で導入は行われている。吉野(2018a)は、自分の子供が小学校高学年でRSCのワークショップに参加したときの経験についても「有名な場面を実際にプロの役者さんが演じてくれたあと、『シェイクスピア(原文のまま)に出てくるけんか』『シェイクスピアに出てくる悪い言葉』を題材にして、子供達も実際に劇中のセリフに挑戦したのだとか」²¹⁾と述べている。SWで展開される各種ワークショップが好

奇心をそそられるものであることは既述したが、授業の一環として教師に引率される劇団のワークショップもそのような性質のものであることが上述の言葉からうかがわれる。イギリスでは俳優を志望する子供が多く、就職してから何らかの形で演劇に関わる大人の存在が当然として受け入れられている。演劇が日常生活に占める重要性は山本(2012)によっても指摘されており、シェイクスピア作品等の古典も演劇の一部として当然のものとみなされていることが示唆されている。²²⁾

小学校におけるシェイクスピアの導入を考えれば、SWで行われるイベントやワークショップは日常生活で展開される授業の延長上にあることがわかる。参加者が増加しているのは、中学卒業に備えるための必然性のみが理由ではないと言えるだろう。

おわりに

イギリスにおいてシェイクスピアは重要な文化的資産であり、また、教育制度の一部として組み込まれている。文化においても教育においても重要で、権威を与えられているが故に、子供たちに敬遠される存在となりかねない。

しかし、イギリスの小学校で行われる授業や課外活動からはそのような圧力は明確には感じられない。カリキュラムの枠を超えた活動や俳優との触れ合いは、シェイクスピアが面白く楽しいものであると子供たちに認識させている。SWにおける活動内容も学校で行われる授業や課外活動と同様の性質を持っている。確かにシェイクスピアは国家によって奨励される対象ではあるが、SWの主催者であるSBTは人々が持つシェイクスピア作品のイメージを興味深く親しみやすいものとするために、授業を補完する役割を果たし、それによって、国家の望むこと—作品群を今後もイギリスの文化的資産とし、国内外で常に意識されるものとする—を実現させようと勤めているのではないだろうか。

注

- 1) “About Shakespeare Week”, <https://www.shakespeareweek.org.uk/news/shakespeare-week-2019/>
- 2) “What We Do”, <https://www.shakespeare.org.uk/about-us/what-we-do/>
- 3) “Why Celebrate Shakespeare?”, <https://www.shakespeareweek.org.uk/about/>
- 4) Ibid.
- 5) Ibid.
- 6) “Kids' Zone”, <https://www.shakespeareweek.org>

- uk/kids-zone/
7) “What does Shakespeare Week have to offer?”,
<https://www.shakespeareweek.org.uk/about/>
8) “Shakespeare Week 2019”, <https://www.shakespeareweek.org.uk/news/shakespeare-week-2019-stratford-upon-avon/>
ワークショップの中には『十二夜』の予告編をiPadで編集しようという企画もあり、デジタルネイティブ世代と呼ばれる子供たちには好奇心をそえられるだろうと思われる。
9) “Shakespeare Week 2019”, <https://www.shakespeareweek.org.uk/news/shakespeare-week-2019/>
10) “Go on a Wild Book Chase this Shakespeare Week”, <https://www.shakespeareweek.org.uk/news/wild-books-2019/>
11) “Witches or Wise Women? The trial of Macbeth’s Weird Sisters”, <https://www.shakespeareweek.org.uk/workshops/witches-or-wise-women-trial-macbeths-weird-sisters/>
12) “What does Shakespeare Week have to offer?”,
<https://www.shakespeareweek.org.uk/about/>
13) “Collection National Curriculum”, <https://www.gov.uk/national-curriculum>
14) “The National Curriculum, Overview, Key Stages”, PRIMARY_national_curriculum_-_English_220714.pdf, SECONDARY_national_curriculum_-_English2.pdf
15) Ibid., SECONDARY_national_curriculum_-_English2.pdf
16) 例えば、“Examiner Report: Paper 1 Shakespeare and the 19th-century novel 1 june-2017”, <https://filestore.aqa.org.uk/sample-papers-and-mark-schemes/2017/june/AQA-87021-W-MS-JUN17.PDF> [sic]
17) PRIMARY_national_curriculum_-_English_220714.pdf
18) 佐藤 (2014)。
19) 吉野 (2018b)。
20) 吉野 (2018a)。
21) Ibid.
22) 山本 (2018b)。

参考文献

Department for Education, *The National Curriculum*,
<https://www.gov.uk/national-curriculum> (2019 年 5 月 7 日閲覧)。

- , *English Programmes of Study; Key Stage 1 and 2*,
https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/335186/PRIMARY_national_curriculum_-_English_220714.pdf (2019 年 5 月 7 日閲覧)。
-----, *English Programmes of Study; Key Stage 3*, https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/244215/SECONDARY_national_curriculum_-_English2.pdf (2019 年 5 月 7 日閲覧)。
Shakespeare Birthplace Trust, *Shakespeare Week*,
<https://www.shakespeareweek.org.uk/> (2019 年 5 月 7 日閲覧)。
佐藤由美「イングランド地方の小学校におけるシェイクスピア教育の理想形とは—2008 年の場合」『常葉大学経営学部紀要』第 2 巻第 1 号、2014 年、pp.19-27。
山本麻子『ことばを鍛えるイギリスの学校 国語教育で何ができるか』初版、岩波書店、2012 年、pp.165-183。
吉野亜矢子 (a) 『こどもまなびラボ』「子どものための英文学 ものがたりが開く世界への扉 第 7 回」2018 年 (<https://kodomo-manabi-labo.net/series/ayako-yoshino-literature-07>、2019 年 5 月 7 日閲覧)。
吉野亜矢子 (b) 『こどもまなびラボ』「子どものための英文学 ものがたりが開く世界への扉 第 8 回」2018 年 (<https://kodomo-manabi-labo.net/ayako-yoshino-literature-08>、2019 年 5 月 7 日閲覧)。

